

# 満願寺跡から出土した貿易陶磁器

舞鶴市郷土資料館ホールにて速報展示

令和2年11月14日（土）～同年11月23日（月）



黒釉白堆線文壺



出土品とよく似た黒釉白堆線文壺  
大阪市立東洋陶磁美術館提供写真

令和元年度に公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した満願寺跡の発掘調査において、国産の土師器や陶器などとともに、中国産の陶磁器が出土しました。中国産陶磁器には、中国南部の福建省周辺で作られた青磁の碗や白磁の四耳壺などがあります。その中でも注目すべき遺物は、日本の平安時代末から鎌倉時代初頭に中国北部の河北省にある磁州窯で作られた「黒釉白堆線文壺」です。

この陶磁器の文様は、表面に白い線状の粘土を貼りつけて描かれ、黒い釉薬が全体に施されています。壺の表面は火災によって剥離し、残った部分も変色しています。

磁州窯は、主に日用品の陶磁器を焼いた窯で、同窯で焼かれたものが日本で出土することはほとんどありません。現在、大阪市立東洋陶磁美術館などに展示されているものは、明治時代以降に美術品として中国から渡ってきたもので、今回の資料は日本国内で初めての出土例と考えられます。

当時大陸との貿易の玄関口であった博多や、都がおかれた京都などでも見つからないことから、通常の流通ルートと異なる経路で陶磁器を入手した可能性があります。



舞鶴と中国陶磁器生産地位置図

公益財団法人

京都府埋蔵文化財調査研究センター

京都府向日市寺戸町南垣内 40-3

電話 075-933-3877

安土桃山時代
戦国時代
室町時代
南北朝時代
鎌倉時代
平安時代

黒釉白堆線文壺の  
作られた時期

満願寺創建  
(1218)



満願寺跡出土の貿易陶磁器と土師器



鎌倉時代礎石建物跡復元

## 満願寺跡について

発掘調査では平安時代末から鎌倉時代の礎石建物跡3棟、石組溝1条、室町時代の礎石建物跡1棟などが見つかりました。数回の火災を経て、室町時代まで建物が発掘調査地点で建て替えられました。室町時代の建物は、鎌倉時代の建物と比べると規模が小さくなっています。

礎石を基に復元できる鎌倉時代の満願寺は、現在よりも大規模な寺院であったと考えられます。また、出土遺物の年代から満願寺の成立は、『紫雲山之縁起』の記述や、現在の本堂に安置されている十一面観世音菩薩坐像じゅういちめんかんぜおん ぼさつ ざぞうの年代以前の平安時代末にさかのぼると考えられます。その後、満願寺の建物は多少位置を変えながらも現在まで続いていることがわかりました。令和元年度の発掘調査は、当時の寺域と考えられる万願寺地域の景観や、満願寺の歴史が垣間見られる貴重な成果となりました。